

平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：32635

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25244002

研究課題名(和文) 生命主義と普遍宗教性による多元主義の展開 国際データによる理論と実証の接合

研究課題名(英文) Development of pluralism invoking vitalism and common religiosity -integration of theory and empirical analysis based on international data of people's beliefs-

研究代表者

星川 啓慈 (hoshikawa, keiji)

大正大学・文学部・教授

研究者番号：10173585

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 37,700,000円

研究成果の概要(和文)：多神教国(日本、タイ、台湾、インド)及び啓典宗教国(トルコ、イタリア、ロシア、アメリカ)からなる8か国4千人以上を対象にした社会調査の分析結果を確率モデルに基づいて統計学的に分析し、諸国民の信念や態度の構造を実証的に分析した。その結果、宗教的信念は国による質的な差はなく量的な違いのみがあるような共通の1次元の構造となり、各国共通指標である「宗教度」が得られた。宗教度は、神秘体験を主として個人的な特性によって決定され、主観的幸福感や自己愛性やウェルビーイング、嬉しい体験、ボランティア等の社会活動、美術館・クラシック音楽などの文化的行動、戦争に関連する態度、他宗教への態度(多元主義)と関連がある。

研究成果の概要(英文)：We have conducted statistical analysis based on probabilistic model with results of social survey in which more than 4,000 people in 8 countries responded, including polytheism countries (Japan, Thailand, Taiwan, India) and countries of Abrahamic religions (Turkey, Italy, Russia, USA), to detect a structure of the beliefs and attitudes of the people based on empirical evidence. Internal religious beliefs can be represented by a common one-dimensional structure where only qualitative differences but no quantitative difference exists. We have developed "religious degree", which is common among all countries. The religious degree is determined mainly by personal characteristics such as mystical experiences, and it is related to social activities such as subjective happiness, self-love and well-being, happy experience, volunteer, cultural behavior such as visiting to museums/classical concert, attitudes towards war and towards other religions (so called pluralism etc.).

研究分野：宗教学

キーワード：国際比較調査 多元主義 生命主義 スピリチュアリティ 普遍宗教性

## 1. 研究開始当初の背景

宗教研究において、「多元主義」という用語は宗教の神学・哲学的研究と宗教の実証的・社会学的研究とでは内容は異なる。神学・哲学的研究における多元主義は、J・ヒックに代表されるように唯一の「究極的實在」「神的存在」を根柢に据える。対して、実証的・社会学的研究は種々の宗教が多元的に存在している事実的状况を意味する。つまり、これまで理論的考察と実証的考察とが、別々に行われてきたことを表している。本研究は、理論的研究と実証的研究とを相互に関連させ、現代宗教の多元的状况を分析したい。

ヒックを代表とする多元主義の問題点は「真實在の根本的同一性を理解したことで信徒が寛容になった」という手続きにある。なぜなら、教義的な共約不可能性を解消できるほどに真實在を会得することは、通常は常人の域を超えていると判断すべきだからである。これは、理論的研究においてもすでに指摘が為されている。星川が翻訳を手がけたJ・ボヘンスキーは「神」という語を「名」と「記述」に分け「神」が名であるのかそれとも記述であるのかを決定するには、宗教的言説の使用者の認識論的状況を考慮しなければならないという。つまり、「名」とは神を直示的提示したものであり、G・リンドベックのいう「認知 命題型」に対応する。それに対し、直示的提示に直接かかわらなかった信徒が神の話を聞くことを「記述」とし、リンドベックのいう「文化 言語型」に対応する。リンドベックの「文化 言語型」は不可知論に支えられており、ボヘンスキーは信徒のほとんどが現状では神を実際には体験していないと結論付けている。

上記のような多元主義の問題は、すでにデータでも示されている。一例として、弓山・渡辺らによるこれまでのいくつかの実証調査がある。例えば、2011年に実験計画的に合成された宗教的体験談を評価させる実証調査を日米で行ったところ、回答者の多くは宗教的体験談の受け入れについて、社会的文脈に左右された非一貫的な判断を下しており、多元主義者でもその非一貫的な判断の傾向に差は無かった。ちなみに、社会的文脈にかかわりなく一貫性を示したのは、自分の信念に反対するものを一貫して拒絶する排他主義者だけであった。

上述2点は、理論研究における「多元主義」が理想であり、虚構に過ぎない可能性を示唆している。そこから、今後の理論研究が検討すべき戦略は、二つある。第一は、「寛容」に代わる力点を用意することである。第二は、その力点を支える支点として、従来強調されてきた「究極的實在」「神的存在」に代わって、「生命主義的救済観」や「スピリチュアリティ」に可能性を見出すことである。

## 2. 研究の目的

現代の宗教研究は、社会の要請と一体となって「寛容」を重視する方向にある。「寛容は

良いこと、非寛容は悪いこと」というのが社会的通念であり、「非寛容=排他」というように理解されてきた。しかし、“exclusivism”を「排他主義」と訳すことには政治的意図を読みとることもでき、“exclusivism”を「自分の宗教に専心する」という意味で「専心主義」と訳すことも可能である。「自分は自分の宗教に専心する」ことは、他宗教の信徒にもその権利を認めることになる。つまり、対外的に他宗教に対して、内容的にも形式的にも寛容になることに繋がる。しかし、社会的文脈にかかわりない一貫性を示したのが排他主義者だけであることに鑑みると、単に専心主義と読み替えただけでは「他宗教の信徒にもその権利を認める可能性」などない。本研究では、そのような排他主義に陥りやすい極端な信徒ではなく、「緩やかな信徒」の専心主義に注目する。2012年の日本での調査データによれば、多くの信徒は神などの「真實在」についての存在論的な質問に「分からない」と答え不可知論のようなスタンスをとっている。このような「緩やかな信徒」こそが信仰者の大多数を占める多数派なのである。このタイプの信徒は、特定宗教への専心性を持ちつつも、緩やかなるゆえに他宗教へ非寛容になる必然性も低い。つまり、緩やかな専心主義を中心に据えることで、強いて寛容を目指すことなく結果的に寛容的であるのと同様の成果が得られると期待できる。このように考えれば、神などの宗教的真理・真實在について、不可知論的で専心主義な立場からの緩やかな理論構築は、まさに宗教共存のための支点となるだろう。

そこで重要な示唆を与えるのが、對馬・島蘭の「新宗教の思想は民衆の漠然とした宗教意識を体系化している」という「生命主義的救済観」や島蘭・弓山の「スピリチュアリティ」の研究である。それは、「緩やかな信徒」の現実に即しており、もしその宗教性が国際的に普遍的であることを示すことができれば、研究者目線の「究極的實在」「神的存在」に代わって、宗教が多元的かつ平和裏に共存するためのより現実的なパースペクティブを提供できるだろう。

また、従来知られていなかった新たな宗教性を発見することも可能である。例えば、上述の日米調査では、生命主義的救済観と歴史宗教・終末的根本主義・対抗文化主義とは二項対立ではなくむしろメタ構造に調和的に包摂されることが明らかとなった。より広範な国際的実証研究の中で、より大きな構造が発見されることが期待される。また、日米調査では、大村(1990)の「真宗Pと真宗C」の指摘のように、教義と信徒の宗教概念との間のかい離が検証された。ここで、真宗Cは生命主義的救済観に近いと言える。このような信仰者の実態に即した宗教性の構造抽出も期待される。

## 3. 研究の方法

世界の宗教研究の多くは、理論・実証ともに

欧米のキリスト教をもとに発展してきた。世俗化論や合理的選択理論から欧米の宗教状況が理論化され、数十カ国が参加するヨーロッパ価値観調査、世界価値観調査、ISSP (International Social Survey Program) 調査などで宗教の実証的な国際比較調査・計量分析が行われている (Hill and Hood1999, R. Inglehart & W. Baler 2000, L. Halman & V. Draulans 2006, R. Finke & A. Adamczyk 2008)。しかし、キリスト教の伝統と大きく異なる日本においては、理論・実証ともに宗教概念や専門用語が異なるため (例えば「神」、「宗教」、「スピリチュアリティ」)、単純な翻訳では等価な概念を見いだすことが困難で (真鍋 2003)、何らかの工夫をしなければ、日本の宗教を世界の宗教研究の中での確に論じることができない。そこで本研究は、「漠然とした宗教意識」において普遍的に共有される宗教概念と、逆に各国ごとに特徴的な宗教概念との候補を整理することから始める。そのため、宗教教義や学術的な宗教理論を文献や事例から収集し、情報技術 (IT, Information Technology) を活用することで、多くの教義や宗教理論に含まれる複数の宗教概念間の関係を一貫したデータベースに整理する。次に、質問文をデータベースに格納し、宗教概念と質問の相互関係を整理する。上記のように宗教概念に対応した質問項目を確定して、世界各国で定量調査を行なうことで、宗教意識の普遍性と特殊性に関するデータを収集する。

このように、本研究のような多国に渡る国際比較では、今までの宗教理論が想定していない全く新しい普遍性・特殊性の発見が期待できるとともに、逆に先行諸理論が提起していた宗教概念・宗教性との相互関係を検証することもできるだろう。

宗教概念データベースが、このような各宗教の教義や学術的な宗教理論などの諸概念と共に生命主義的救済観の特徴概念と、さらにはそれらの相互関係を格納しているため、効率的で一貫した分析とその後の「多元主義」の理論的検討の接続が可能となる。

多神教国 (日本、タイ、台湾、インド) 及び啓典宗教国 (トルコ、イタリア、ロシア、アメリカ) からなる 8 か国 4 千人以上を対象にした社会調査の分析結果を確率モデルに基づいて統計学的に分析し、諸国民の信念や態度の構造を実証的なエビデンスに基づいて分析した。

#### 4. 研究成果

内宗教的信念は、国による質的な差はなく量的な違いのみがあるような共通の 1 次元の構造となる。すなわち、ある教義的な内容 (宗教的信念要素) をある人が信じるかどうかの確率が、その宗教的信念要素の難易度 (どの程度信じられ易いのかという確率) と、その人の宗教度 (どの程度信じやすいのかという確率) によって決定される 1 次元の単純な数式を導出でき、その数式構造は各国で共通で

ある。ここでは、「この世のあらゆるものは、目に見えない力により相互に関係しあって存在している」などの具体的または倫理プラス超越という要素は難易度が低くなり誰でも賛成しやすいが、「世界が不完全であることには、むしろ聖なる意味がある」などの抽象的または超越的な要素や「宗教的儀礼において、食物を食べることで、神とつながることができる」などの「前近代的」な要素は難易度が低くなり、宗教度の高い人でないと信じることは難しい。そして宗教度は主として個人的な特性によって決定され、特に大きいのは神秘体験の効果である。

ここで、近代的宗教概念の影響を受けているはずの大卒者 (インテリ) であるかどうかは、「前近代的」なものも含めた宗教教義的な信念の構造 (質) にも量にも影響をしない。1 次元の共通構造が存在しかつそこに近代的な教育成果が関係しないというこれら結果は、宗教概念批判にネガティブな社会科学的エビデンスであるように思われる。なぜそのようなことになるのだろうか。これは、宗教的行動が社会的に共有され観察可能でかつ外見的多様性が大きいものに対して、宗教的信念や経験は概して個人的で観察可能性が低かつ多様性が小さいため、アンカリングなどの認知バイアスによって宗教の多様性が過度に強調されたためである可能性がある。人と猿の行動や外見が大いに異なることは進化論への反発を生んだが、実際には DNA という観察不可能な構造はほとんど同じであることを想起されたい。もちろん、大卒 (学歴) 以外に歴史性を反映できる代替指標を検討する余地はあるが、そもそも歴史的系譜を定量的・客観的に検証することは困難であり、宗教についての理論的考察が客観性を担保できるのかどうかは慎重な考慮に値する。

一方で、間宗教的態度は、他の神や宗教にどのような判断を下すかという、社会的に共有される観察可能な反応であり、多分に行動的な側面が強い。そのためか、間宗教的態度は、明確に分化された多次元の構造となり、国別の文化による差が顕著に生じ、個人的特徴の効果は無視できる。たとえば、日本の宗教性は非排他的で包摂的であるという特徴がある。「世界には正しい宗教は 1 つしかない」への賛成確率が 8 か国で平均 28% であるのに対し、日本はわずか 8% である。宗教的寛容という日本的美徳の表れかもしれない。日本は、「複数の『神』にはそれぞれに役割がある」、「宗教にはより正しい宗教からより間違った宗教に至る幅がある」などからなる多神教的包摂主義とも呼べる因子のスコアも高い。このように、間宗教的信念が質的な違いのある 4 次元構造であるという点はいわゆる多元主義などの理論にポジティブなエビデンスなのだろう。

これらの構造をもとにして、様々な分析が可能となる。例えば、宗教と戦争の関係について検討すると、宗教が戦争の原因であるとい

う見解をめぐって、多くの議論がなされてきたが、今回の調査結果で「宗教と戦争」に関連して得られた命題は、以下の7つである。(1) 宗教度が高いほど、宗教の正しさにも関心を持つ。(2) 宗教度が高いほど、宗教の正しさに断定的になる。(3) 宗教度が高いほど、自分の宗教が一番正しいと考える。(4) 宗教度が高いほど、全ての宗教の正しさは等しいと考える。(5) 宗教度が高いほど、寛容性と非寛容性の両方が増加し、曖昧さが減少する。(6) 宗教度が高いほど 宗教的愛国心は増加する。(7) 宗教度が高いほど、世界の平和を神に祈るようになる。これらは相互に関連しているが、とりわけ(3)と(4)は興味深い。なぜなら、両者は両立し難いように思われるからだ。本発表では、「宗教的専心主義」も加味しながら、この矛盾をいかに「解釈」すべきかを考察していくことが今後の課題である。

また、宗教度と幸福との関連に注目すると、宗教が精神的健康に影響を与えること、特に主観的幸福感やウェルビーイングと密接な関係にあることは、つとに指摘されてきた。今回の調査でも宗教的信念を持つ(宗教度が高い)ほど幸福であることが解明された。ただ同時に宗教的な(宗教度が高い)ほど自己愛性が高いことも明らかになった。さらに自己愛であるほど幸福であることも示唆された。この宗教的であること、幸福であること、自己愛であることとの関係を考察するとともに、嬉しい体験という充実感、ボランティア体験といった社会活動、美術館に行ったりクラシック音楽を聞いたりする文化的行動との関連も分析した。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 16 件)

川端亮、宗教性の測定における共通性 3 回のインターネット調査の経緯、大阪学大学院人間科学研究科紀要、査読無、44巻、2018、61-78、doi/10.18910/68291

真鍋一史、『宗教性』の概念・測定・分析( ) 『8か国における宗教意識調査』を事例として、関西学院大学社会学部紀要、査読無、128巻、2018、57-84、ISSN 0452-9456

真鍋一史、The Component and Structure of Religiosity in Japan: Data Analysis of the World Values Survey、査読有、青山スタンダード論集、13巻、2018、171-190、SSN 1880-6430

川端亮、どのような宗教研究が求められているのか、ソシオロジ、査読無、62巻、2017、139-141

川端亮、宗教的信念における共通の因子 8カ国調査の結果から、大阪学大学院人間科学研究科紀要、査読無、42巻、2016、189-208

長谷川恵美、John Hickの宗教多元主義再考 言表不可能な実在が意味するもの、桜美林論考人文研究、査読無、7巻、2016、117-136

星川啓慈、宗教対話的難題及突破困境的方法 基于語言哲学視角的宗教対話活用語“層次化”問題考察、世界宗教文化、査読有、97巻、2016、1-7

星川啓慈、Michael Staudigl、A Schutzián Analysis of Prayer with Perspectives from Linguistic Philosophy、Human Studies、査読有、1巻、2016、1-21、10.1007/s10746-015-9377-x

松野智章、フォーマットとしての宗教施設 プルーリズムと神社の役割、東洋学研究、査読有、52巻、2015

Kawabata, Akira、Acceptance of Religious Testimonies、Osaka Human Sciences、査読無、1巻、2015、141 - 157

島園進、天皇崇敬・慈恵・聖徳 明治後期の「救済」と実践と言説、歴史学研究、査読無、932巻、2015、26-37

Wolfgang Jagodzinski、真鍋一史、ヨーロッパの国々における宗教と道徳の多元主義 理論的考察と実証的知見 -、関西学院大学社会学部紀要、査読無、112巻、2015、11-23、ISSN 0452-9456

Wolfgang Jagodzinski, 真鍋一史、ヨーロッパの国々における宗教意識の変容「国際比較調査」のデータ分析、関西学院大学社会学部紀要、査読無、120巻、2015、65-77

星川啓慈、太陽とウィトゲンシュタインの宗教体験 一九三七年三月に書かれた『哲学宗教日記』の分析、大正大学研究紀要、査読無、100巻、2015、13-25

真鍋一史、Problems with and Prospects for the Data Analysis of Cross-National Comparative Surveys: With Examples from Religious Consciousness Surveys、青山総合文化政策学、査読有、9巻、2014年、1-27

宮嶋俊一、宗教多元主義と宗教学、神奈川大学国際経営学論集、査読無、48巻、2014、139-143

[学会発表](計17件)

横井桃子、川端亮、宗教性が文化活動に与える影響 SSP2015調査データによる実証研究、数理社会学会、2018

真鍋一史、国際比較の視座からする日本人の宗教性の measurement model の構成『世界価値観調査』のデータ分析、「宗教と社会」学会、2017

真鍋一史、The Measurement Instruments of Japanese Religiosity from a Comparative Perspective: Data Analysis of the WVS 6th Wave and the Religious Consciousness Survey in Eight Countries、European Survey Research Association(ESRA)、2017

川端亮、渡邊光一、A cross-cultural dimension of religious belief among eight countries、Survey Research and the Study of Religion in East Asia、2017

渡邊光一、川端亮、One dimensional structure of religious belief among four thousand people in eight countries、Society for the Scientific Study of Religious Association Annual Meeting 2017、2017

秋庭裕、川端亮、A cross-cultural dimension of religious belief、A Comparative Study of Religiosity Measurement in Korea and Japan、2017

宮嶋俊一、宗教と暴力をめぐる一考察、比較文明学会、2017

真鍋一史、宗教性の概念・測定・分析 国際比較調査データの探索的分析、「宗教と社会」学会、2016

川端亮、因子分析による宗教的信念の共通構造、日本宗教学会、2016

宮嶋俊一、宗教的信念の国際比較のための用語について、日本宗教学会、2016

真鍋一史、ヨーロッパの国々における宗教の変容をめぐる諸理論は実証的な調査データによって確認されるであろうか?、「宗教と社会」学会、2015

長谷川恵美、J.Hickの宗教多元主義再考、日本宗教学会、2015

星川啓慈、太陽とウィトゲンシュタインの宗教体験 ショルデンの小屋にて、日本宗教学会、2014

真鍋一史、Problems with and Prospects for the Data Analysis of Cross-National Comparative Surveys: With Examples from Religious Consciousness Surveys、Asian Network for Public Opinion Research、2014

真鍋一史、ヨーロッパの国々における宗教意識の変容「国際比較調査」のデータ分析、「宗教と社会」学会、2014

宮嶋俊一、多元主義的宗教理解と宗教学、日本宗教学会、2014

松野智章、多元主義における宗教とは何か 諸理論の検証と考察、日本宗教学会、2014  
〔図書〕(計9件)

長谷川恵美、春秋社、深い河の流れ—宗教多元主義への道、2018、297

川端亮、稲場圭信、新曜社、アメリカ創価学会における異体同心、2018、236

星川啓慈、明石書店、宗教哲学論考 ウイトゲンシュタイン・脳科学・シュツツ、2017、382

仁平尊明編、宮嶋俊一、北海道大学出版会、悩める人間 人文学の処方箋、2017、257

ウイトゲンシュタイン、星川啓慈、石神郁馬、春秋社、ウイトゲンシュタイン「秘密の日記」 第一次世界大戦と「論理哲学論考」、2016、302

上杉清文、末木文美士、小野文瑠、佐藤弘夫、大谷栄一、中島岳志、R.アビト、若松英輔、澁澤光紀、島園進、福島泰樹、斎藤文一、安藤礼二、三輪是法、岡田真美子、春秋社、シリーズ日蓮5 現代世界と日蓮、2015、239-262

似田貝香門、村井雅清、三井さよ、清水亮、川上憲人、成元哲、新原道信、高橋雅也、石井正己、吉原直樹、伊藤美登里、島園進、川上直哉、伏見英俊、谷川洋三、堀江宗正、東京大学出版会、震災と市民2 支援とケア、2015、149-174

川端亮、有斐閣、「宗教の二面性 - 否定的イメージと人の幸せ」数土直紀編『社会意識からみた日本 階層意識の新次元』、2015、290

星川啓慈、石川明人、並木書房、人はな

ぜ平和を祈りながら戦うのか? 私たちの戦争と宗教、2014、238

6. 研究組織  
(1)研究代表者  
星川啓慈 (HOSHIKAWA, Keiji)  
大正大学・文学部・教授  
研究者番号: 10173585

(2)研究分担者  
川端亮 (KAWABATA, Akira)  
大阪大学・人間科学研究科・教授  
研究者番号: 00214677

島園進 (SHIMAZONO, Susumu)  
上智大学・実践宗教学研究科・教授  
研究者番号: 20143620

渡邊光一 (WATABABE, Mitsuharu)  
関東学院大学・経営学部・教授  
研究者番号: 30329205

秋庭裕 (AKIBA, Yutaka)  
大阪府立大学・公立大学の部局等・教授  
研究者番号: 40222533

弓山達也 (YUMIYAMA, Tatsuya)  
東京工業大学・リベラルアーツ研究教育院・教授  
研究者番号: 40311998

対馬路人 (TUSHIMA, Michihito)  
関西学院大学・社会学部・教授  
研究者番号: 60150603

宮嶋俊一 (MIYAJIMA, Shunichi)  
北海道大学・文学研究科・准教授  
研究者番号: 80645896

真鍋一史 (MANABE, kazufumi)  
青山学院大学・地球社会共生学部・教授  
研究者番号: 90098385

長谷川 (間瀬) 恵美 (HASEGAWA, MASE, Emi)  
桜美林大学・人文学系・准教授  
研究者番号: 90614115

榎尾直樹 (KASHIO, Naoki)  
慶應義塾大学・文学部 (三田)・准教授  
研究者番号: 50233698

松野智章 (MATSUNO, Tomoaki)  
大正大学・文学部・非常勤講師  
研究者番号: 20723662